

## (一) 本校開学の前史

本校は大正十五年二月十一日、三田義正翁によって創立された。したがって、本校の開学前史は義正翁の人となりとその理念にさかのぼらなければならぬ。

**義正翁小伝** 三田義正は、文久元年四月二十一日、盛岡市四ツ家赤川の地で出生した。父義魏、母キヨ。幼名を寅太郎と称し、のち元服して義正と改めた。

義正は十五歳のとき、まず仙台の宮城英語学校に学ぶが、青雲の志やみ難くさらに上京し、津田仙の塾に書生として住み込みながら講義を聞いた。津田仙は、幕末のころ、五代友厚に従って米国に渡り、明治六年にはウィーンの万国博覧会に出張してもっぱら洋式農業を研究し、帰国してから、麻布に私立農学校「学農社」をおこし、あわせて農業雑誌を発刊するなど、わが国における洋式農学の創始者である。この津田塾での薫化がどんなに決定的なものであったかは、義正のその後の経歴に明瞭である。また、わが岩手中学誕生の萌芽も、この時代に胚胎するのである。

維新のなごりが色濃い明治初期の東京である。戊辰戦争で薩長の征東軍に敵対した南部藩は朝敵とみなされ、それ以来東北人に対して、「白河以北一山百文」という嘲笑の言葉があげられるようになった。津田仙の塾で学んでいた俊秀多感な義正青年も折にふれこの言葉を耳にし、いくたび

となく悲憤の涙にくれたという。この屈辱を一掃する方途は、同郷の人材を養成する以外にない、そう義正は痛感した。しかしこの育英思想が学校設立となって開花するまでには、さらに五十年の歳月を必要とした。

津田塾を巣立った義正はただちに故郷に帰り、一時県庁に勤めたが、役人では実学が生かせないと在職一年で退職した。その後新知識をひろめながら、自らも農業の多角経営を実践した。山林会社「養立社」の設立をはじめ、盛岡市郊外、高松、厨川方面の広大な地にはじめた洋式農耕、牧畜、製糖事業等がそれである。しかし事業はことごとく失敗した。事業の天才をうたわれた義正も、弱冠二十歳のころはまだ才幹機略ともに身につかず、失敗の連続であった。失敗を挽回しようと、政治運動に身を入れたりしたがかえって伝来の田地を人手に渡す羽目ともなった。失意の果て、北海道に渡って血路を開こうとしたこともあるという。

この失意の彼に起死回生の息吹きを与えたものは、母キヨの激励と、堅い岩に根を張り、無言の教訓を垂れる石割桜であった。義正が石割桜を修養の糧としたことは、よく人に語ったところで、本校校章の由来もここにある。

明治二十年、義正は二十六歳で県会議員に当選した。二十二年には市会議員に当選、以後また県議当選と、しばらく政治活動が続く。だが明治二十七、八年の日清戦争を機に翻然として実業界に転進した。国運を賭した戦争遂行にあたって、外国から戦費を借用しなければならなかった祖国の実状を深く肝に銘じたからであったという。以来

終始一貫、実業界に献身して変らなかつた。

大正十一年、義正翁は貴族院多額納税議員に当選した。この任期は、大正十四年六月まで続く。今や功成り名を遂げた翁の胸中の念願は、年来の夢、人材養成の殿堂、設立のことであった。機は熟したのである。

### 設立への動き

翁は実弟俊次郎を通じて、時の県学務課長関壮二に中学校設立の希望があることを伝えた。関と俊次郎は親しい間柄であった。翁と関はまだ面識はなかつたが、翁の意気に感じた関は、さっそく学校経営計画書を作成した。当時、文部省は最小限五万円の財団法人をもって設立許可の方針であったので、関は、五万円、七万円、十万円の三案をつくつたという。

翁は周到であった。関が作成した計画書を携えて、貴族院議員鎌田栄吉、文部次官南弘、帝国教育会長沢柳政太郎、内閣書記官高橋光威、元岩手県知事柿沼竹雄らに相談した。すなわち理想的な学校をおこして老後の仕事として楽しみたいと。さて、相談をかけた鎌田は、十万や二十万ではできない、百万はかかると言い、高橋は十万でもできるだろうが……と言つたという。鎌田は

文部大臣、枢密顧問官などに任じられる前は慶応義塾の塾長だった人である。百万円という額は慶応方式からの算出であった。また沢柳は自らも成城学園を創設した人物だけに、教育家の立場から、私学が重大な使命を持つてゐることを述べ、これが翁に強い刺戟を与えた。

その後翁はしばらく動かかなかつたが、大正十四

年十二月のある日、関を自宅に訪ねて言った。「とても十万や二十万で中学校を建てても、後日他人に迷惑をかけてはならないから止めた」と。だがその晩も二人の話はやはり教育上の話になった。一体に近來の学生は軽薄である。自分などは二里の道を二時間かかって毎日通ったものだが、成績はすこぶるよかつたもので、役人になってからかえって頭も体もわるくなつた。当時は何をやっても苦痛など感ずることがなく、すべて愛校の精神に燃えていたのである。しかるに今の学生等は、三里も歩こうものならずぐに参るだろう。学業についても始終小言ばかり言っている。私どもは、かえって先生を鞭撻したものだと言つた。翁も関と同様に感じていと応じて、実感の例を述べた。旅行の途中、一中学校の修学旅行の生徒のだらしなきを見て、現代物質教育の弊害を痛感した。何とかして理想的な学校をつくつてみたいものだ。今の教育は生徒の機嫌をとり過ぎるようだ。教育は精神で、これがなければ教育はない。もつと漢学に基礎を置いた、精神教育による緊張した生徒の養成が必要であると翁は述べた。二人は肝胆相照らし意気投合した。話はずみ翁が辞



三田 義正



鏡 保之助



北田 親氏



関 壮二

したのはすでに十一時過ぎであった。翌朝はやばやと翁は県庁におもむき、電話で関の出立をうながした。昨夜はお断りしたが、どうも現代学生の意志の薄弱なのは憤慨にたえない。十万円やるからどうかやつてほしい。一切をお任せすると話した。関は、それは困るといったんは断つたが、翁の熱意に押されて引き受けた。まず理事にその人を得なければならぬと、高等農林の鏡校長を訪ねた。鏡は、一文も利の上らぬことに大金を投ずるのは偉いことだと、理事を承諾した。次に市長室に北田市長を訪ねて事情を話した。北田も賛成して理事をひき受けた。話もまとまっていよいよ創立となつたが、それには何か記念の日がよからうと、二月十一日が選ばれた。こうして紀元節官民合同祝賀会のあと、いずれも大礼服のまま内丸の三田邸に集まつた。

### 創立宣言

集まつた人士は鏡保之助、北田親氏、関壮二といった顔ぶれで、ここで創立總會となつた。席上、翁は改めて中学校設立の決意を明らかにし、いろいろな準備に着手した。したがつて、この日が本校創立記念日となつたのである。

ここに當時を語る関壮二の書簡がある。昭和十四年十月二十日付、岩手中中学校長あてである。岩中の創立に關係した人々の大部分は戦前すでに物故し果てて、戦後も健在なのは関壮二ただ一人であつた。余命いくばくもないと感じた関は、岩中創立の経緯について詳細な記録をしたためた。この際、岩手中中学校がいかんにしてできたかという事を書き記し、同校に学ぶ生徒のために残しておくのも一つの功德との発意からであつた。長文のものであるが抜萃して参考に供したい。義正翁については次のように書いてある。

「三田義正氏は正義の士剛腹の人であつた。漢学仕込みの実業家であり近代文化式の型でなし、硬教育論者であつたから当世学生の懦弱なものには憤慨措く能はざるものがあつた。当時の学生は親の脛嚙りで温室育ち、意志薄弱な懦弱児が多かつた。義正君は屢是等の学生を見て慨嘆すること少なからず剛健なる精神と強靱な身体の鍛練を主とする硬教育論者であつた。中学校建設の動機は茲に在つたのである。」

また創立直前のころの模様は次のように書かれている。

「翌朝三田氏から電話があり十万円は一切君に任せるから是非やってみるとの事で双方押問答の結果、社会公共の利益のためであるからとて私が引受けて計画することになった。その時の三田氏の条件として、十万円は中学校設置費、外に二万円は母の名義で育英資金を作り、貧しき篤学の生徒の学費を補給してやり度いとのことで、十二万円の財団法人を作ることになった。現今の為替レート（注・時価の意）に換算して二百六十万円に当る。」

前にも述べた通り私は三田義正氏とは格別懇親といふ訳でない。只私が教育に関係ある学務課長たる身分あるだけである。然るに三田氏は中学建設を決意するや十二万円を投出して一切を私に委任したので。三田氏の徹底的性格が現われて面目躍如たるものがある。」

（中略）

「船出は順風に帆が挙げた。幸先は非常に好調であった。」

二月十一日紀元節奉祝の式典が官民合同で物産館庭前で挙行された後、創立委員会を三田義正氏邸で開いた。財団法人設立に対する文部省への手続は万事私から文部省に交渉して順調に進捗した。

茲で岩手中学校並に育英資金を含む財団法人は設立され、理事としては理事長三田義正、理事校長鈴木卓苗、盛岡高等農林学校校長鏡保之助、

盛岡市長北田親氏、今一人は三田氏の最親交厚かりし海軍大将榑内曾次郎が選任された。共に各界一流の人物で申分はないと思われた。」

当時の情勢 義正翁の決意表明が伝えられると県都の新聞は、「私立中学設置、教育界の慶事」と題する評論を掲げ、

「この報に接せる多数青年は勿論その父兄が齊しく大早の雲霓（うんげい）を望むの概ある理なしとせず、冀くは早く其の企画を実現し之を大にしては我が文運に貢献し之を小にしては多数青年を救済せられんことを。」（二月十九日付「岩手毎日」）

と大歓迎した。

当時、岩手県の県立中学校は盛中、関中、福中、遠中、黒中の五校だけで、全県的に入学難の時代でもあった。盛岡市参事会が時の県知事得能佳吉に、盛岡第二中学設置の請願書を出したのもこのころである。県は出費多端であったため、この与望にそうすることができなかった。

そのころ、ある人が義正翁に、「中学校が不足して好学の若人を苦しめているから、ぜひ私立中学校を設立して欲しい」と進言した。翁は即座に、「三田には、県立中学校の不足を補うために学校を建てるなんて、そんな大それた考えはないし財力もない。学校設立は、かねてからの願いであり、郷土から人材の輩出することを願って止まないから、微力ながら学校をつくるのだ」と言ったという。岩中の設立は時流に乗った思いつきの事業ではなかったのである。

## (二)岩手中学校の創立

開校準備 企画担当の関は、新設校の構想として次のように語った。

「三田氏のおかげで入学期の情勢が緩和されることになったが、県でも別に異議なく校舎を貸してくれるだろうと思う。貸しさえすれば実行できる。最初の入学人員は百名で授業料は三円五十銭か四円位。当分校長に年俸三千円、百二十円の教員三人位にその他嘱託をおくが、待遇は県立学校よりはよくして立派な校風を作りたいと思う。授業料は宮城山形の両県では県立中学校で四円も徴収しているから、私立に四円位の授業料は寧ろ安いと思う。」（大正十五年二月十六日付「岩手毎日」）

授業料は関の言ったとおり四円と決まったが、関の楽観した校舎問題は意外に難航した。当初、校舎としては大沢川原の女子師範学校附属小学校を予定していた。この年四月から仁王小学校が師範附属として代用されることになり、大沢川原の校舎はあくことになっていたのである。二月二十六日、翁は鏡、北田、関らを帯同して得能知事を訪ね、校舎借受けを懇請した。その時は借用期間を五カ年と定めていったんその承諾を得たのだが、その後県当局の態度が煮え切らず、なかなか貸与の決定がおりなかった。「一富豪の事業に便宜を与うるは却って他の悪感を催さしむべきにより許可せざるようとの説もありました」と得能が後日述べているように、一部に反対があったのである。内務部長なども反対であった。新聞は「三田義正



当時の岩手県知事 得能佳吉

三田義正氏の

私塾行悩む

附屬小學跡地の

無償貸附問題で

縣當局

三田義正氏が... 附屬小學跡地の無償貸附問題で... 縣當局... 猿澤青年兵營生活... 工兵隊と前工兵隊

校舎の難航を報ずる新聞(岩手日報)

愈々出来る

岩手中學校

三田氏の手を離れて 財団法人で經營する

關學務課長談

三田義正氏の... 岩手中學校... 水澤金ヶ崎 兩農業倉庫... 南部伯夫妻... 一日盛岡出發

大正15年3月末学校名が公表された

氏の私塾行悩む」と書いた。このままでは文部省への申請がおくれるのである。翁らは非常に焦慮した。三月三日夜、翁はまた鏡、北田、関らと知事官舎に得能を訪ねて陳情を重ねた。得能は同情的であつた。県参事会で校舎貸付が決定したのは、三月三十日のことである。

こうして、三月三十一日、かけ込むようにして岩手獎学会の設立、岩手中學校の設置開校の件を申請するのである。そして四月十九日ついに認可をみた。以下にその書類の文面と、創立時の岩手獎学会役員名とを掲げる。

(写)

岩普第貳壹号

財団法人岩手獎学会設立者 三田義正

大正十五年三月三十一日申請財団法人岩手獎学会設立ノ件民法第三十四條ニ依リ許可ス

大正十五年四月十九日

文部大臣 岡田良平 印

(写)

文部省告示第貳五五号

岩手中學校ヲ岩手県盛岡市ニ設置シ大正十五年四月ヨリ開校ノ件大正十五年四月十九日認可セリ

大正十五年四月二十一日

文部大臣 岡田良平 印

- 理事長 三田 義正 評議員 富田小一郎
理事 柄内曾次郎 同 上村 勝爾
同 鏡 保之助 同 太田 達人
同 北田 親氏 同 遠藤 政直

- 同 鈴木 卓苗 同 大矢馬太郎
同 古市利三郎
同 鈴木勝二郎
同 諏訪 安造
同 三田 義一
監事 三田俊次郎
同 山本 茂寿
同 堀合 由巳

校名の決定

さて校名はどうするのか。しばらく「三田氏の私塾」「第二中學校」「私立中學校」と新聞に出ていたが、三月末「岩手中學校」と正式名が発表された。翁の裁断である。ありふれた名称だとの評もあつたが、そのありふれたところが義正流であつた。「盛岡」といわず「岩手」としたのは、その収容する学童を盛岡に限らず、県下一般に推し及ぼす気持からであつた。

ある時、客が翁に向かって、米国ではその寄附者の名を校名に冠するものが多い。ジョンズ・ホプキンス大学などはその例である。新設中學校もその例にならい「三田中學校」と称してはどうですかと進言した。これを聞くと翁は色をなして「予は学界の現状を見、多数学童と父兄の衷情を察し此の筆に出でしのみ、予が姓を以て校名に冠するが如きは売名の嫌いあり、予が断じて取らざる所也」と言つたという。客は翁の高風に感じて失言を謝した。「岩手毎日」はこの校名問題を論評して、次のように結んでいる。

「方今滔々たる社会その為す所、射利にあらずんば売名にあらざるなし、然るに氏の今回の筆



入学試験場であり、入学式場であった岩手県物産陳列所

# 岩手中學入學式

二十二年午前十時

岩手中學開校は十九年文部大臣の訓令により設立されたものである。創立二十二年、即ち開校十周年の機会に、地方には夫々多量な財力を投じて、中上級の教育を受けることになり、入學試験合格者は父兄は其代り、同校に同席して、入學式に出席するべし。

**授業開始**

二十四日より

岩手中學開校は五ヶ年、即ち創立二十二年、即ち開校十周年の機会に、地方には夫々多量な財力を投じて、中上級の教育を受けることになり、入學試験合格者は父兄は其代り、同校に同席して、入學式に出席するべし。

青年訓練所  
入所特典

授業開始を報ずる新聞

は全く犠牲的精神に出で、その高潔所謂貪夫をして廉ならしめ懦夫をして起たしむるものなくばあらず、氏の此の精神を伝えて以て同校の校風を成し、高潔義勇の士を輩出せんや必矣、吾人は同校に対し、多大の期待を有するも、豈徒爾なりとせんや。」（大正十五年四月一日）

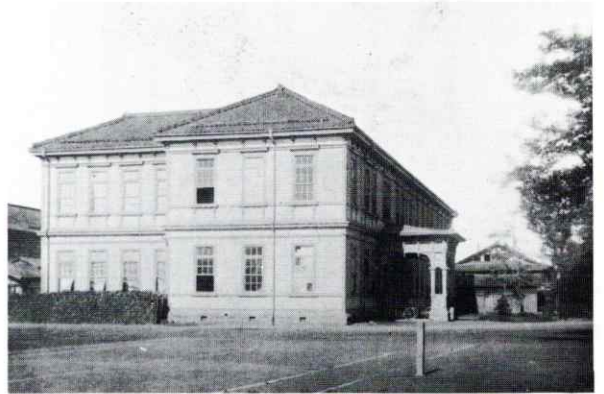
**入学試験** 設置認可に先立ち、三月十五日には生徒の予約募集を行い、入学試験は四月十五、六の両日、物産館楼上で行われた。初日、まず北田理事から学校設立に関する簡単な演説があり、筆答試験に入った。午前は算術、午後は国語であった。翌十六日は身体検査であった。志願者二十四七名、受験者は二四六名、合格一〇六名であった。これを地方別に見ると次のとおりである。

- 郡市別 受験者 合格者
- 郡市別 受験者 合格者
- 盛岡七〇 五五
- 東磐井 五〇
- 岩手 四四 一六
- 気仙 二二
- 紫波 二六 一五
- 上閉伊 一〇 三

- 種貫 一〇 三
- 下閉伊 七〇
- 和賀 一二 三
- 九戸 一五 二
- 胆沢 五 二
- 二戸 七 〇
- 江刺 八 一
- 他府県 二三 四
- 西磐井 二〇 〇
- 計 二四六一〇六

**入学式** 三田義正翁の情熱と理解者の協力とが実を結び、大正十五年四月十九日に岩手中学校の設置開校が正式に認可された。その三日後の四月二十二日午前十時から、歴史的な第一回の入学式が、内丸の岩手県物産陳列所を暗れの会場としておごそかにとり行なわれている。創立者の義正翁をはじめ、多数の来賓・父兄・教職員が列席する中で、入学を許された百余名の生徒たちは、い

ずれも中学生生活への期待に胸をはずませていた。まず鈴木卓苗校長が教育勅語を奉読し、ついで入学生徒の氏名点呼が行なわれた。そして鈴木校長が壇上に立ち、私立中学の権威と責任について



開校以来12年間学んだ大沢川原校舎

三十分間の熱弁をふるった。これを受けて、入学生総代の外館正三が、学校の方針に従う旨の宣誓をした。

続いて来賓祝辞に移り、鏡盛岡高等農林学校長が欧州の教育を例にとり、岩手中学の誕生を喜ぶあいさつを述べた。さらに山口岩手県警察部長、北田盛岡市長、藤根盛岡農学校長らから、それぞれ心のこもった祝辞があった。最後に父兄総代の長内県会議員が謝辞を述べ、十二時に入学式はとどこおりなく終了した。なお午後一時からは、日盛軒に来賓を招待して、本校創立記念祝賀会が催された。

こうして、生徒はもちろん、父兄も教職員も、この新しい中学校の誕生に限りなく誇りをいだくとともに、立派な学園にしようという決意を固めたのであった。